

俳諧師西鶴の軌跡

——その蠢動期の再検証を中心として——

森 田 雅 也

一、はじめに

井原西鶴（一六四二—一九三〇）の文人としての来歴は夏目漱石のそれに似ている。

漱石は一九〇五年に『吾輩は猫である』によって小説家として登場する。続いて『坊っちゃん』『草枕』などを発表して、教壇を退き、東京朝日新聞に入社、執筆に専念。その後も『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』『道草』、未完の『明暗』まで数多くの小説を書き、四十九歳で亡くなっている。そのため、「小説家・夏目漱石」の印象はすこぶる強い。しかし、小説家としての作家生活は晩年の十年ほどであって、それまでの人生はイギリスへの国費留学以前から英文学研究に打ち込み、帰国後は第一高等学校教授、文科大学の講師として英文学を講じ、それらをまとめた『文学論』『文学評論』にみるように一流の英文学者として知られていた。また、正岡子規との交遊から俳句、漢詩も作り、深い人間・文化認識に基づいた講演の数々などがあり、「小説家」としての側面からのみ近代文学史に名を刻むのは半面像に思える。

五十二歳で亡くなった西鶴もまた、早くから俳諧師として活躍しながら、晩年約十年の文事をもって、浮世草子作

家として日本文学史に名を残している感がある。(傍線は森田。以下同じ。)

『好色一代男』が好評を博し、その続編として『諸艶大鑑』が出版された貞享元年(一六八二)頃)にはもう西鶴は、読者に娯楽を提供する作者の態度になりきっている。住吉における最後の矢数俳諧の興行は、あるいは俳諧への袂別を意味するものであったかも知れない。事実西鶴は当時の俳壇の傾向に嫌らず、もっぱら嘉太夫節の浄瑠璃に慰み、歌舞伎子に熱を上げていたのである。(中略)西鶴の晩年は、教条的苛酷な儒教主義の政治とデフレとインフレによる深刻な経済不況に悩まされていた時代である。西鶴の浮世草子はそのことをよく物語っている。元禄二年(一六八九)四十八歳の後半から同四年まで、西鶴はなぜか浮世草子の作を絶っている。反対に、一度は袂別したはずの俳壇にはつぼ姿を見せ始めている。

その間の事情もまだよくわかっていないが、多分それは肥満型体質であった西鶴の身体的故障によるものである。晩年の書簡に「今程目をいたみ筆も覚へ不申候」とみえる。眼の故障のために小説の執筆が不可能になったのである。そこで再び俳壇に復帰したのである。しかしその俳諧の作品は、もはや往年の面影はなく、沈潜した人生観照の句が多くなっている。(『国史大辞典』「井原西鶴 担当野間光辰」より)

右の説の大概は西鶴は俳諧師として大いに活躍したが、途中から『好色一代男』などの刊行の思わぬ人気から俳諧をやめて浮世草子作家に転じた。晩年は体調のせいからか浮世草子作家をやめ、俳諧世界に戻ったものの往年の力はなかった、というものである。この説が人口に膾炙したのか、一概に言えないものの、項目担当の野間光辰氏の『西鶴年譜考証』などの精緻な分析からは定説として甘受すべきとなつている。しかしながら、そこに再考の余地はないか。以下、再検証を試みたい。

二、俳諧師西鶴年譜

以下、その基本資料として、「俳諧師西鶴」としての面からその記事を年表とした。「俳諧師」とあえて冠したのは単なる俳諧愛好者としてではなく、当時すでに諸師諸芸または諸職の一つとされていた職業俳人ともいべきものを意識している。もつともこれには点者・作者などの区分と明確化することが必要かも知れないが、厳たるに欠けながらも「俳諧師」とした。年譜の作成方法としては『図録西鶴』⁽¹⁾、『西鶴年譜考証』⁽²⁾、江本裕氏の御業績⁽³⁾より森田が補訂した。また、改元の煩瑣からわかりやすいように西暦を立てた。

- 一六四二（寛永十九）年 一歳 大坂に生まれる。
- 一六五六（明暦二）年 十五歳 俳諧を志すか。（『西鶴大矢数』巻四跋）
- 一六六二（寛文二）年 廿一歳 俳諧点者となるか。（『石車』巻四）
- 一六六六（寛文六）年 廿五歳 三月 西村長愛子編『遠近集』に鶴永号を以て発句入集。
- 一六六六（寛文七）年 廿六歳 夏 『大坂独吟集』所載。郭公独吟百韻成る。
- 一六七一（寛文十一）年 三十歳 三月 高瀧以仙『落花集』に発句入集。
- 一六七二（寛文十二）年 三十一歳 正月 内藤風虎編『櫻川』に発句入集
- 一六七三（寛文十三）年 三十二歳 九月 「餅花や 柳はみどり はなの春」
「延宝」と改元。
- 正月 寛文十三年歳旦控に鶴永号にて歳旦発句あり。

六月 生玉神社南坊において万句興行をし、『生玉万句』を編纂上梓。

十月 『歌仙大坂俳諧師』を編纂上梓、発句並びに自画像。

冬 鶴永改め西鶴と号す。この頃、西山宗因の弟子となる。

一六七四(延宝二)年 三三歳 正月 歳旦発句集に歳旦発句あり。

一六七五(延宝三)年 三四歳 四月 岡西惟中著『俳諧蒙求』に付合入集。

四月 『大坂独吟集』刊、宗因評点の郭公独吟百韻一卷入集。

四月 三日、西鶴妻没、享年二十五歳。菩提寺誓願寺に葬る。

四月 八日郭公独吟千句を手向け、『俳諧独吟一日千句』を編纂、上梓。

十一月 伊勢村重安編『糸屑』に発句入集。

一六七六(延宝四)年 三五歳 一月 『俳諧大坂歳旦発句三物』刊⁽⁴⁾。

十月 『俳諧師手鑑』を編纂上梓。

是年 片岡旨恕編『草枕』刊か、旨恕との両吟歌仙一卷、旨恕・西舟・西夕と

の四吟歌仙一卷入集。

一六七七(延宝五)年 三六歳 四月 中村西国に『俳諧之口傳』を授ける。

五月 生玉本覚寺で独吟千六百句独吟を興行、『西鶴大句数』と題して上梓。

九月 奈良中院町極楽院にて大和多武峯西院の僧、月松軒紀子、矢数俳諧を興

行し、千八百句独吟を成就。

十一月 岡西惟中編『俳諧三部抄』に発句並びに付合入集。

冬 剃髪。

一六七八(延宝六)年 三七歳

三月 前川由平・中村西国と三吟、「胴骨三百韻」成る。

五月 青木友雪編『櫻千句』刊、西鶴一座。

五月 月松軒紀子編『大矢数千八百韻』刊、菅野谷高政判。

八月 片岡旨恕編『難波風』に、旨恕・貞因・昌本との四吟。『何馬百韻』入集。

秋 筑前の西海、上阪して京阪の俳士と参会し、俳諧を興行。西鶴これを

『大硯』と題し、序文を加えて上梓。西海との両吟歌仙一卷入集。

秋 京都那波律宿亭において田代松意と参会し、三吟三百韻を興行。翌日、

河野定俊に誘われて嵯峨野を遊山。両吟歌仙一卷を巻く。これらを『俳諧虎溪の橋』と題し上梓。

秋 高石石齋編『珍重集』、「烏賊の甲や我が色こぼす雪の鷺」の独吟百韻を

所収。

十一月 『物種集』を編纂上梓。

是年 早川西随編『五徳』刊、西鶴一座五吟五百韻入集。

是年 『三鐵論』に独吟百韻一卷入集。

是年 『博多百合』を編纂上梓。散逸。

一六七九(延宝七)年 三八歳
正月 「吉書也天下の世継物がたり」の歳旦発句画賛あり。

正月 歳旦集「春枕」あり。

正月 岡西惟中編『太郎五百韻』刊、西鶴一座の百韻入集。

- 二月 井筒公木編「四吟六日飛脚」に、公木・友雪・遠舟・西察との四吟百韻一卷入集。
- 三月 水雲子編『難波雀』刊、俳諧点者の条に西鶴の所附あり。
- 三月 仙台梅睡庵において大淀三千風矢数俳諧を興行し、三千句独吟を成就後、これを西鶴に託し、同八月『仙台大矢数』と題して刊行。
西鶴跋文を加え、歌仙一卷を贈る。
- 三月 撰津鴻池山本西六亭において、西六・西花・西吟・西友と五吟百韻を興行し、『西鶴五百韻』と題して上梓。
- 三月 尾州鳴海下里勘兵衛宛書簡あり。
- 四月 中村西国編『見花数寄』刊、西国との両吟歌仙一卷入集。
- 五月 青木友雪編『両吟一日千句』刊、友雪との両吟千句及び西鶴跋文あり。
- 七月 三田浄久編『河内鑑名所記』刊、発句入集。
- 八月 桑折宗臣編「詞林金玉集」に発句入集。
- 八月 下里吉親（知足）編「稿喚統集」成り、西鶴評点知足・美言・如風等の八吟百韻一卷を収める。
- 八月 仙台木村一水催しにて、生重・辰壽・一水・頓悦・定方・重行・友雪・立花等と歌仙六卷を興行、『句箱』と題して上梓。
- 九月 杉村西治編『二葉集』刊、西鶴付句入集。
- 十月 『飛梅千句』刊、大坂天満社頭にての一日千句を所収。

一六八〇（延宝八）年 三九歳

十一月 岡西惟中編『近来俳諧風体抄』に発句並に付句入集。

十一月 富永辰壽編「道頓堀花みち」に発句並に付句入集。

十二月 中島随流著『俳諧破邪顕正』刊、西鶴を「阿蘭陀西鶴」と罵る。

十二月 片岡旨恕編『わたし船』刊、西鶴一座・梅翁・旨恕等百韻二卷入集。

冬 松江維舟著『俳諧熊坂』刊、西鶴を「ばされ句の大將」と罵る。

是年 『杉やき』を撰述上梓。散逸。

四月 和氣遠舟編『太夫櫻』を刊、発句並に付句入集。

五月 神戸友琴編「白根草」に発句入集。

五月 生玉神社南坊で再度の矢数俳諧を興行、一昼夜四千句独吟を成就。

六月 尾州鳴海下里勘兵衛宛大矢数成就の書簡あり。

八月 木原宗圓編「阿蘭陀丸二番船」に付句入集。

閏八月 播磨飾磨西漁子著『俳諧太平記』において、岡西惟中を貶め、西鶴を

「楠西鶴」と褒美する。

九月 中村西国編「雲くらひ」に付句入集。

冬 澤井梅朝編「江戸大坂通し馬」所収梅朝両吟歌仙一卷興行。

一六八一（延宝九）年 四十歳

九月 「天和」と改元。

三月 齋藤賀子編『山海集』刊、西鶴版下挿絵、発句入集。

春 熱田に兼頼を訪ね、『熱田宮雀』開板成就を祝い、両吟歌仙を興行。

四月 『西鶴大矢数』刊。

延宝年間のその他西鶴の俳業

五月 太田友悦編「それぞれ草」に発句並に付句入集。
秋 齋藤賀子編「みつがしら」に賀子との両吟百韻一卷入集。

両吟版下『点滴集』に発句入集。

編者未詳『昼網』に発句並に付句入集。

編者未詳『堺絹』に発句入集。

一六八二（天和二）年

四一歳

正月 大幡蛇鱗編歳旦集「犬の尾」に発句入集。

正月 土橋春林編『百人一句難波色紙』刊、西鶴自画自筆版下。西鶴自画像並に賛句あり。

正月 西村未達編『關相撲』刊、西鶴点評歌仙一卷を収める。

三月 西山宗因没、七十八歳。

四月 紙谷如扶編『三ヶ津』刊、発句入集。

四月 梅林軒風黒編『高名集』に西鶴版下挿絵。発句入集。

五月 中堀幾音編『家土産』に発句入集。

十月 『好色一代男』刊。

一六八二（天和三）年

四二歳

三月 西山宗因一周忌追善集『精進膾』刊。

八月 『夢想之俳諧』表九句独吟執筆。

一六八四（貞享元）年

四三歳

二月 『貞享』と改元。

江戸版『好色一代男』『諸艶大鑑（好色二代男）』刊。

六月 住吉神社で矢数俳諧、一昼夜二万三千五百句独吟興行。

八月 中村西国編「引導集」に付句入集。

十月 『俳諧女歌仙』を編纂上梓。

一六八五（貞享二）年 四四歳 『歴』『西鶴諸国はなし』『椀久一世の物語』『凱陣八嶋』刊。

正月 鈴木清風編『稻筵』に発句入集。

一六八六（貞享三）年 四五歳 『好色五人女』『好色一代女』刊。

三月 水田西吟編「庵櫻」に発句入集。

一六八七（貞享四）年 四六歳 『本朝二十不孝』『男色大鑑』『懐硯』『武道伝来記』刊。

一六八八（貞享五）年 四七歳 九月 「元禄」と改元。

『日本永代蔵』『武家義理物語』『嵐無常物語』『色里三所世帯』『新可笑

記』『好色盛衰記』刊。

一六八九（元禄二）年 四八歳 『一目玉鉾』『本朝桜陰比事』刊。

十一月 「俳諧のならひ事」を筆作。

一六九〇（元禄三）年 四九歳 五月 上島鬼貫編「大悟物狂」に西鶴一座の百韻入集。

八月 月津燈外編「生駒堂」に、燈外・来山・由平・萬海・鬼貫等との六吟半

歌仙一順並に発句入集。

九月 加賀田可休著『物見車』に西鶴点を難ずる。

十月 北条團水編「秋津島」に発句入集。

十月 北条團水著『特牛』で加賀田可休に駁す。

一六九一（元禄四）年 五十歳 『枕久二世ものがたり』刊。

正月 北条團水歳旦集に西鶴歳暮吟あり。

正月 嶋順水編「渡し船」に発句並に西鶴・才磨等一座の七吟四十四一卷入集。

正月 高木自問編「難波曲」に発句入集。

正月 北条團水編『團袋』刊、西鶴序等あり。

五月 流木堂江水編「元禄百人一句」に発句入集。

五月 萩野律友編「四国猿」に律友との半歌仙並に萬海・律友との三吟第三まで入集。

六月 室賀轍士編「我が庵」に発句並に轍士・萬海等との四十四卷入集。

八月 難波松魂軒の匿名で『石車』を刊、加賀田可休著『物見車』を駁す。

八月 齋藤賀子編「蓮實」に発句、並に賀子との両吟、賀子等四吟、歌仙二卷入集。

十一月 麻野幸賢編「河内羽二重」に幸賢・来山との三吟歌仙一卷並に発句入集。

十二月 歌水艶山両吟歌仙卷に評点。

一六九二（元禄五）年 五十一歳 『世間胸算用』刊行。

一六九三（元禄六）年 五十二歳 大坂鍵屋町の草庵で没する。享年五十二歳。

冬 『西鶴置土産』刊。

二、難波の俳諧師西鶴の軌跡

西鶴の私生活が未だ解明されていないことは衆知のことである。どこで生まれ、どのような身分の家に生まれ、父が誰で、母が誰で、本来の家業は何で、西鶴自身がどのような生業で生活し、その拠点たる場所がどこであったか、本名が何であったか、まったく何も明確になっていない。

したがって、右のように西鶴の文事を俳諧を中心に整理したが、生年は辞世の句とされる「浮世の月見過ごしにけり末二年」から遡つての類推でしかない。本姓も井原氏とも平山氏、名も藤五とも伝えられるが、ここで「西鶴」とすることに間違いはない。ただ、出自が定かならざるのに「難波」とするのは、大坂を中心としたという意味であつて、その俳業と晩年の浮世草子作家としての出版にいたるまでが大坂に基盤があるからである。ただ、浮世草子作品の文芸としての展開は別項⁽⁵⁾として、ここではふれない。

右の年譜にあるように、十五歳の頃から俳諧を学び、後に西山宗因に師事し、大坂談林俳諧のメンバーとして活躍した。俳諧師として独立したのは寛文二年、二十一歳のことである。西山宗因門下の談林俳諧の俊秀としての西鶴の特徴は、その後、「阿蘭陀流」と称された自由奔放な俳諧的世界を拡大化して、延宝年間（一六七三〜八二）、矢数俳諧（弓術の大矢数をまねて、一日の間につくった句数の多さを競う俳諧興行）を創始して世間の注目を集める。延宝五年五月に一六〇〇句を独吟し、ついで延宝八年五月には四〇〇〇句を独吟、翌年『西鶴大矢数』と題して刊行した。その序に「自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已来也（このかたなり）」と宣言している。この間、三十四歳のとき妻を失い、三人の幼児を抱える家庭的な不幸を経験したとされるが、速吟と浮世の日常を題材とした風俗詩を武器とする西鶴の激しい自己主張は、旧来の俳諧に限界を見ていた新しい集団が掲げる統率者としての地位を固め

ていく。

西鶴は延宝八年六月二〇日付鳴海下里勘州宛書状を發して矢数俳諧の成功と師・西山宗因から褒美をあずかったことを報告している。書中の「今度西山宗因先師より、日本第一前代之俳諧の性（マツ）と世上に申わたし候、さてさてめいばく此度也」は西鶴が難波だけでなく、全国レベルにおいても日本一の俳諧師となったことを、当代随一の大宗に公認されたことを意味している。

俳諧師西鶴の名声は、この延宝年間における膨大な俳業とたびたびの俳諧大矢数興行の成功で一気に高まり、「難波」「大坂」の「西鶴」という俳諧師は地方俳壇の人々に知れ渡った。結果、俳人としての交流も全国区に拡がり、大坂を起点に江戸・京都などの都市俳壇、地方俳壇との絆は西鶴によって大成し、その事象は談林派そのものの全国制覇に繋がったといえるのである。

一見、西鶴の延宝年間は、私事の妻との死別以外は、順風満帆の俳業のようであるが、西鶴を巻き込んだ談林俳壇を揺るがす事件が起こっている。

西鶴とともに大坂談林俳壇に名を馳せていたのが岡西惟中（一六三九—一七一）であった。

江戸時代前期の浪人学者、俳人。はじめ松永氏。通称平吉、名は勝。号惟中・一時軒・北水浪士ほか。寛永十六年（一六三九）因州鹿野の産。父は没落武士。惟中ははじめ土地の先学に和歌・歌学を学び、青年以後岡山に住み京都の烏丸資慶に歌学を、青蓮院宮尊証入道親王に書道・歌学の免許を受けた。学をもって岡山藩に仕官を志したが失敗したらしい。その間俳諧にも興味を抱き寛文九（一六六九）、十年ごろ西山宗因に入門、談林俳諧全盛期の波に乗って俳諧寓言論を鼓吹しつつ俳論・評論活動を展開、延宝六年（一六七八）にはついに宗因跡目をねらって大坂に進出、談林随一の論客として筆陣を張り、実作の井原西鶴と双壁をなす。しかし延宝末の談林衰退と同時に俳壇を去り、本来の歌学・儒学にもどったが外題学者との評もあり、学問的には二流に終った。俳論

『俳諧蒙求』『近來俳諧風体抄』、古典注釈『枕草子旁註』『諸鈔正誤』徒然草直解』その他の著あり。(『国史大辞典』「岡西惟中」項目担当・今榮蔵)

右は果たして、岡西惟中の胡乱な文事を見事にまとめられた項目である。いつの間にか、「寓言論」なるものを持つて談林俳壇の理論派を標榜し、大坂に寓居を求め、延宝年間には俳諧活動を積極的に展開し始めた。

延宝八年正月、歳旦三物に「撰州大坂」「西山梅翁跡目」「一時軒惟中」として京都から井筒屋庄兵衛方より発行するという蛮行があった。これは西鶴ら談林派の諸氏を差し置いた僭越な談林俳壇二代目宣言である。

先に延宝七年十二月に、貞門派の中島随流著『誹諧破邪顕正』が談林派を烈しく難じて、西山宗因を「紅毛流の張本」と罵り、大坂の代表として西鶴を「阿蘭陀西鶴」、京都の代表として菅野谷高政を「惣本寺半伝連社高政」として攻撃しているが、「大坂の岡西惟中」の名はあがらなかった。惟中としては沽券に関わる屈辱で、翌年の歳旦三物の「西山梅翁跡目」という自称に発展してしまっただけである。

しかし、惟中の蛮行は続いた。延宝八年二月に『誹諧破邪顕正返答』を刊行し、宗因及び宗因俳諧に対する随流の論難を排撃し、反対に同門の高政延いては西鶴をも「文盲不智の輩」・「師伝を背」く「不才放埒」者と暗に貶め、己れを以て「梅翁師の正統」を継ぐ者なることを言外に匂わせている⁽⁶⁾。これは惟中が「梅翁師の正統」と宣言したのと同じ由々しき事態である。が、直なる西鶴の反論も宗因の反響も未見である。

しかしながら、西鶴はすぐに惟中のみならず、すべての談林俳人へのメッセージとも言うべき行動をとる。それが延宝八年五月に催された生玉神社で催された矢数俳諧興行である。この矢数俳諧は延宝九年四月に『西鶴大矢数』として刊行されるが、野間光辰氏は、この一連の行為について、

延宝九年四月刊行の『大矢数』巻四西鶴自跋に、「予俳諧正風初道に入て二十五年、昼夜心をつくし、過つる春末の九日に夢を覚し侍る。」と述べてゐる。これは西鶴の俳諧師としての生涯において、特筆すべき事件であ

ると思ふ。抑も「夢を覚し」たといふことは如何なることをいふのであらうか。即ち、「今世界の俳風詞を替品を付、様々流儀有といへども、元ひとつにして更に替る事なし。惣て此道さかんになり東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已来也。」といふ一大自信に到達したことに外ならない。しかしてその大自信に基いて再度世に問うたのが、是歳五月興行の矢数俳諧、四千句独吟俳諧であつたのである。(7)

と指摘されている。矢数俳諧興行の成果は、先述した下里勘州宛書状にあるように面目躍如、師の西山宗因から「日本第一」と誉れをいただくことになるのである。この書簡が事実なら西山宗因が認めた談林の後継者は西鶴であるということになる。結果、中島随流への論駁にもなり、惟中の跡目略奪への抑止にもなったのである。

「生玉大矢数」ではなく、「西鶴」と冠したことに西鶴の自信と自負が感得できる。

談林俳壇での揺るぎない地位を獲得した西鶴であつたが、延宝期が終わると、その翌年の天和二年三月、師・西山宗因が没する。宗因はこの年正月も大和郡山で歳旦の連歌発句を詠んでいるので、突然の死ではなかつたようだが、七十八歳という享年は老衰と言つてよく、『西山宗因全集』に、その前年中に「生涯の連歌発句を自選浄書して『宗因発句帳』成るか」とあるように、自他とも、その終焉を予期していたと推察できる。

そのためであろう、西鶴はその年、宗因没後半年余りしか経たない十月に『好色一代男』を刊行して、浮世草子の世界に身を転身するのである。版下は少なくとも没後四十九日過ぎた頃には取りかかつていたであろう。この半年ほどの間に談林俳壇に何が起きたか、有力な史料はないが、先の跡目問題に巻き込まれたくない西鶴がそこにあつたのではあるまいか。やはり、貞享元年六月に行われた住吉神社で矢数俳諧、一昼夜二万三千五百句独吟興行は俳業の中で一区切りをつけたという意味で、可視化された回答とも言える。

その後も貞享年間を通じ、俳諧から離れたわけではないが、『好色一代男』の異様すぎる人気は、西鶴の次なる作品を望んで止むことがなく、浄瑠璃も含めて年間五作品前後の浮世草子を刊行していく。研究史の中でも、『好色一

代男』のみが西鶴自作であるとか、西鶴工房なるものがあつたとか取り沙汰されるが、延宝期の多忙さからは決して不思議ではない。

さりながら、俳諧への情熱は残っていたのであろう。元禄四年に弟子の北条團水を絡めて、難波松魂軒の匿名で『石車』を刊行し、加賀田可休著『物見車』を駁した論調はかつてない凄烈なものであつたが、詳述は別項に譲りたい⁽⁸⁾。また、元禄二年正月に刊行された『一目玉鏢』は地誌と分類されるが、蝦夷千島から五島・壹岐・対馬に至る間の城下町・宿駅・物産・社寺・名所・古跡・故事・古歌などを記述しており、絵入りのため、旅行案内記ともされるが、俳諧師西鶴が諸国を巡ったり、情報を集めた成果である。序末にも「難波俳林」と肩書きしていることから難波の俳諧師としての自負が伺える。また、その所載の名所が西廻り航路と重なることなどはこれも別項に譲りたい⁽⁹⁾。

以上のように俳諧師西鶴の軌跡を俯瞰したが、私的に俳諧師西鶴としての足跡を三期に分けて考えたい⁽¹⁰⁾。極めて事象的であるが「第一期 蠢動期（出生〜寛文・延宝元）」、「第二期 躍動期（延宝元〜貞享）」、「雪辱期（元禄）」と名付けたい。第三期は相応しくない命名のようであるが、かつての談林俳壇の木鐸の雪辱期とした、今後も論を加えたい。

四、俳諧師西鶴の蠢動期の再検証

再び、第一期についてのみ検証を加えたい。「井原西鶴」という人物はほとんどの事典類に立項されているものの、その時期の記事に落着くものは得られない。先述の『国史大辞典』よりその部分を引用する。

江戸時代前期の俳諧師、浮世草子作者。本名平山藤五。伊藤梅宇の『見聞談叢』によると大坂の富裕な町人の子

弟であったが、幼少にして父に死別し、家業を手代に譲つてみずからは俳諧に遊び、諸国を遊歴するかたわら小説に筆を執つたという。西鶴自身の記すところによれば、明暦二年（一六五六）十五歳のころ俳諧を学び、寛文二年（一六六二）二十一歳の時には早くも点者として独立したという。俳号を鶴永と称した。最初は貞門古風を学んだようであるが、のちに談林俳諧の祖西山宗因に師事したことが、西鶴のその後の生涯を決定することになる。延宝元年（一六七三）三十二歳大坂の生玉において興行した『生玉万句』は、すなわち彼が宗因門の新鋭として、みずから「阿蘭陀流」の軽口・狂句の新しさを天下に呼号した第一声である。

「幼少にして父に死別し、家業を手代に譲つ」たか否かは想像の域であるし、ここではさほど重要ではない。むしろ、「俳諧に遊び、諸国を遊歴」したか否かの方が重要である。なるほど、西行は生涯の大半を奥州から九州までのさすらいの旅ですが、これは西鶴と同時代を生きた芭蕉（一六四四—一六九四）が『奥の細道』（一七〇二）冒頭で「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」と唱えてから定着した俳人として持ちあわせるべき境涯、さらに言えば俳諧師としての修業の一つではあるまいか。何も芭蕉が登場する前のこの時期に、西鶴が俳諧師を志すために「諸国を遊歴」したとは思えない。

論者は以前より、拙論として主張しているように西鶴は隠居するまでの青年・壮年期、米商人として、海の道より全国を廻り、交遊範囲を拡げたのであり、その結果として晩年の浮世草子の多くが諸国話の形式をとることに繋がった⁽¹¹⁾と考えている。その意味では逆の発想で諸国物産の流通圏をまわることで、全国を知り尽くしており、それが俳諧に役立ったと言えるのである⁽¹²⁾。

彼の地の海運、川運の流通拠点には経済的に豊かとなった素封家がリーダースhipをとり、富裕さとともに生まれた文化熱が俳諧の遊びを覚え、やがてそれは旦那芸としての地方俳諧文化圏を形成し、そこに大坂俳壇の旗手・西鶴

が風交を尽くす。彼が「大坂談林俳壇」の雄として相互交流を行い、都市談林と地方談林を結びつけたのである。事実、地方俳諧文化圏を形成した人々は流通文化圏の盟主たちであったのである¹³⁾。

ところで、右に「明暦二年（一六五六）十五歳のころ俳諧を学び」とは誰からどのような俳諧をまなんだのであるか。俳諧の道に入った年は、西鶴自らが『西鶴大矢数』（一六八一）巻四跋で「予俳諧正風初道に入て二十五年」と記しているところから遡つて明暦二年としているに過ぎない。客観的な記録は未見である。この当時の俳壇は松永貞徳をいたたく貞門派が全盛期であり、従来より西鶴についても初めは貞門俳諧に学んだと言う説が多い。しかし、二十一歳で俳諧点者とする説も『石車』（一六九二）巻四に「誹道に入て三十余年」「我三十年点をいたせし」とあるのを遡ただけである。現研究状況にあつては西鶴の師匠系列は明らかでないという判断を下すのが妥当であろう。

ただ、西鶴が貞門俳諧に学んだとする言説の拠り所にしても西鶴の年譜を当時の俳諧史に被せたにすぎない。だがしかし、「談林派」の定義は難しい。『日本国語大辞典』『談林派』において、

江戸時代、寛文（一六六一～七三）末年から延宝年間（一六七三～八一）にわたつて俳諧文学の主流となつた流派。西山宗因の軽妙で自由な作風のもとに、大坂の新進気鋭の俳人西鶴・惟中らが集まつて反貞門的で奔放自由な新流派を形成した。中世の宗武・宗鑑の作風を継承することを標榜したが、当時の庶民の生活感情を反映して、その現実生活をいっそう強烈にうたい上げている。延宝三年（一六七五）頃から江戸の新鋭俳人桃青（芭蕉）・幽山・松意らに加わり、さらに京都俳壇の高政・常矩らも同調するに至つた。当時は西翁流・宗因流・梅翁流などと称していたが、のちに江戸の田代松意一派の自称であつた「談林派」が、この派の名称とされるようになった。

とするように、諸説は貞門俳諧の作風のマンネリズムを打破するため、「西山宗因」をかついで、大坂、ついで全国的に奔放自由な新風を起こし、新流派を形成し、その全盛期を延宝年間前後に求めていることは共通認識であると言

える。穿った見方をすれば、西鶴と師である西山宗因（一六〇五―八二）の俳業に合わせた感さえある。

西山宗因については、その文事とも言うべき活動歴が長いので最も簡潔な解説を引用しておく。

江戸時代前期の連歌師、俳人。通称次郎作、諱は豊一（とよかず）。連歌名は宗因。のち俳号と共用。俳号は一幽、のちに西翁・西山翁・梅翁・野梅子（翁）、別号に長松軒・忘吾齋・向栄庵などがある。慶長十年（一六〇五）加藤清正の家来西山次郎左衛門の子として熊本に生まれた。元和五年（一六一九）十五歳のころから家老八代城代加藤正方（号風庵）の小性として出仕、その感化によって連歌道に入り、ついに終生主従の変わらぬ契りをつぶ。連歌の師は京の里村昌琢で、豊一の名のみえる最も早い作品は、元和七年十月二十四日、佐河田昌俊が興行した連歌百韻である。主正方に従って江戸・京を往来する間、何がしかの作品があり、寛永八年（一六三三）にははじめて宗因を号した。しかし、翌九年突発の加藤家陰謀事件により肥後一國は収公、主従ともに浪人となる。翌十年入京、正方とともに宗因は連歌師として活躍した。正方が仕官運動に失敗して広島藩御預けのち、慶安元年（一六四八）同地に客死するに及び、ついに意を決し、大坂天満宮の連歌宗匠として大坂に下る。以後寛文期に至る間はもっぱら天満宮を根拠として、月次連歌の再興などに活躍、その名声諸國に弘まり、各地に出張、『松島一見記』『筑紫太宰府記』『西国道日記』などの紀行文を残した。またこの時期、京の松江重頼を招いて俳諧を興行し、ついに俳諧師としても指導者の技倆を発揮した。かくて貞門古風の「詞付」から脱却して、軽妙自在な「心付」の特色をもって俳壇に清新の風を吹き入れ、軽口・狂句をもって標榜、ついに談林俳諧の宗枢として仰がれるに至った。守武流また西翁流といわれ宗因晩年に及んで俄然全国を風靡するや、いち早く井原西鶴が馳せ参じた。延宝三年（一六七五）宗因は東下して内藤風虎屋敷に滞在し、松意ら江戸談林の徒と興行、松尾芭蕉・山口素堂らもこれに同調した。また同六年岡山から上坂した岡西惟中、京の菅野谷高政も参加し、宗因流は昂揚の時期を迎える。（後略）『国史大辞典』「西山宗因」（担当 島居清）

再び、俳諧師西鶴の「蠢動期」の検討に視座を移す。そこには西鶴と西山宗因との関係を起点とするのが論じやすいことは一目瞭然である。ところが、これもまた初回の接点が不明である。とはいうものの「西山宗因」については、近年、西山宗因研究の泰斗によって編まれた『西山宗因全集』が完結したので、これによって近世前期韻文史を再検討できるといふ至福の学恩を得た。そこで、俳諧師西鶴の「蠢動期」についても、その「西山宗因年譜」^[4]を、西鶴と西山宗因の関係性を実践躬行したい。以下、「蠢動期」に関わる「西山宗因年譜」に基づいた略年譜をあげる。

一六五四（明暦元）年 五十一歳 冬 約十年住んだ天満宮境内の仮寓有芳庵を去り、某所に寓居する。
一六五六（明暦二）年 五十二歳 正月 俳諧の歳旦発句「明暦や」（『境海草』）。

同 発句「古歌に」（『知足書留歳旦帖』）。

蔭山休安撰『ゆめみ草』に、俳諧発句六、同付句二句入集、「天満之住・一幽」とあり。

二月 清水寺法楽の独吟連歌百韻を賦す。

三月 某人の求めに応じ、『古今和歌集』の書写を遂げる。「宗因 花押」。

六月 連歌師昌隠の七回忌に連歌発句を手向ける。

九月十五日 天満基盤屋町の向栄庵成る。

二十日 「告天満宮文」を草し、連歌百韻とともに天満宮に奉納。

同庵に入る。

向栄庵新造記念の「あさみこそ」俳諧百韻を興行する。発句、重頼。

重頼・連衆、宗因・以春・玖也・顕成・祐是・忠由・保友・三政・執

筆。

十二月 向栄庵において「神の春」の吟成るか。

一六五七（明暦三）年 五十三歳 正月 俳諧の歳旦発句「新春の」（『知足書留歳旦帖』）。

本年前後の春、大坂住の俳人数名と共同で会所を借り、月次の俳諧興行を始めるか（松平文華館藏宗因真蹟短冊詞書）本年以前の春、「ながむとて」俳諧独吟百韻成る。

富永燕石撰『牛飼』に俳諧発句二句入集、「天満・一幽」とあり。

一六五八（明暦四）年 五十四歳 七月 「万治」と改元。

八月頃 京都壬生、寂靜庵順正の聖廟を拝し、法楽の「月清し」独吟連歌歌仙を興行。

是年頃 末吉宗久独吟の同母懐旧「見つる世の」連歌百韻に批点を施す。

一六五九（万治二）年 五十五歳 正月 歳旦吟として、連歌発句「万代を」成る（『宗因発句帳』）。

歳旦吟として、俳諧発句「難波津に」成る（『捨子集』）。

難波入江にて榊原忠次と参会。百韻成る。

夏 榊原家の招請により播州下向。曾根天満宮にて連歌座に出座。

八月 姫路藩邸にて、和歌一首、連歌発句一句、俳諧発句一句を詠む。

同月姫路藩邸において連歌百韻に一座するんどし、九月まで滞在か。

九月頃 榊原政房の参府を機に機姫路を辞し、曾根村で俳諧発句を吟じるな

どしつ、大坂天満に戻るか。

一六六〇（万治三）年

五十六歳

岡本胤及撰『匏屑集』に俳諧発句六句入集か。「大坂」「一幽 六」とするも、完本は現存せず。

本年以前の秋、大坂にて「つぶりをも」俳諧独吟百韻成る。

十月中旬 序刊・高瀬梅盛撰『捨子集』に俳諧発句一句入集。

正月 歳旦吟として、「朝夕の」と詠み、天満・大坂連衆二十三名の歳旦連歌発句とともに、姫路の榊原忠次に贈るか。

正月十五日 序刊・北村季吟撰『新統犬筑波集』に発句三句、付句六句入集。「摂津」「一幽 天満」。

二月 昌啄二十五回忌追善の独吟「年月や」連歌百韻を興行。

三月 姫路藩邸において、榊原忠次及び家中と連歌に興じたか。

四月刊、高瀬梅盛撰『俳仙三十六人』に選ばれ、俳諧発句一句入集。

七月刊、那賀盛之・阿知子顕成撰『境海草』に俳諧発句二十八、付句十句入集。「天満」「一幽 廿七」。

九月十五日 跋刊・谷口重以撰『百人一句』に選ばれ、俳諧発句一句。

九月 正方十三回忌にあたり、「消にきと」懐旧連歌百韻を独吟で賦す。

十月刊、松江重頼撰『懐子』「懐子」に俳諧発句二十五句、付句四十句入集。同「懐子伽」発句十六句、付句百五十七句入集。「大坂之住」「一幽」

冬 伊勢大神宮参詣して連歌発句一句成るか。また、松坂の昌隠旧跡を訪

ねて連歌発句二句成るか。
伊勢滞在中に俳諧発句三句成るか。

一六六一（万治四）年 五十七歳 四月 「寛文」と改元。

冬 正月 宗春と伊勢大神宮法楽の「日の御影」連歌百韻を両吟で賦し、神前に奉納する。

本年前後、作者不知の「つくねても」俳諧百韻に評点を施す。

本年以前の夏、『雪千句』追加「撫物や」俳諧百韻を保友・重安と共に成就。

七月跋刊・高瀬道甘撰『へちま草』に俳諧発句一句入集。「摂州大坂之住一幽 一」

一六六二（寛文二）年 五十八歳 正月 歳旦吟として、俳諧発句「相生の」と詠み、天満・大坂連衆十六名の歳旦俳諧発句とともに、姫路の榊原忠次に贈る。

三月刊、如之撰『伊勢正直集』に俳諧発句十一句入集。「大坂住」「西山一幽 十一句」

三月初旬、大坂を発ち、京に数日滞在後、東海道を下り、夏中を奥州磐城平藩主内藤忠興嫡男義概の江戸屋敷を中心とした文化圏で過すか。

六月序刊、田中光方撰『雀子集』に俳諧発句一句入集。「大坂之住」「一幽一句」。

七月 江戸より磐城平藩に入り、磐城平藩主内藤忠興の城下に至る。

八月 「奥州紀行」。九月に発ち、十月江戸着。越年。その間、少なくとも連

歌会に六回出座。十二月、娘死没の報に接する。

以上、西鶴十三歳から二十一歳にあたる時期の西山宗因の文事をあげたが、西山宗因が主公加藤正方を失い、大坂に移り住み、俳諧師として活躍しながらも、大坂天満宮の連歌所所長として一流の権威ある活動の中にあつたことが知られる。この時期の宗因は連歌師としては姫路・伊勢の地に活動の場を求めており、江戸、東北にも足を運んでいる。俳諧では松江重頼、高瀬梅盛、北村季吟など貞門派俳人との交流が認められる。同時に大坂・天満衆というような大坂俳壇を指麾する立場にあつたことがわかる。

それでは西鶴が十五歳で初めて俳諧を嗜んだ際の師や門流は誰であつたか、という問いであるが、貞門派というよりは、大坂の俳壇の何某ではなかつたろうか。元服を済ませていたかどうかは不明ながら、俳諧の道にあそぶならしかるべき仲介者、それが親兄弟か番頭級の者としても旦那遊びとして、相応の分知り、が嚮導したであろう。その際、大坂に住まう者であれば、俳諧を志すにあたり、すでに西山宗因と彼に心服する大坂衆・天満衆は無視できない存在になつていたのではなからうか。

それなら、初めから西山宗因から一字をもらい、「西鶴」とすべきであつたかもしれない。しかし、右に見るように、この時期の俳諧師西山宗因は句引から確認するように「大坂」または「天満」の「一幽」として活躍していたことがわかる。西鶴は初め鶴永、のち西鶴と号したことは判っている。他に西鵬・鶴翁・四千翁・二万翁・松寿軒・松風軒・難波俳林などの号があるが、「一」や「幽」の付くような号はない。その意味からは、やはり、初めの師は大坂衆、天満衆と呼ばれていたグループに属していたのではないかと推察できる。

西鶴は鶴永時代、三十二歳で『歌仙大坂俳諧師』を編纂上梓しているが、友人たちとともに貞門派の古老を多くあげている。やはり、そこには若年で大坂衆、天満衆から可愛がられる西鶴が若き日の俳諧師の姿が、そこにあったのではあるまいか。

ところが、寛文二年に西鶴二十一歳にして、俳諧点者となったとする拠り所がない。それどころか、右の西山宗因の文事からは、その頃、連歌師として大名家等からの求めに応じ、日本列島を縦横無尽に移動する姿が映し出されている。寛文三年からは豊前小倉、太宰府などが加わり、寛文四年には、再度の奥州下向となる。

それだけに寛文二年当時の西山宗因は磐城平藩の内藤親子、豊前小倉の小笠原忠真といった大名との風交に夢中で大坂俳壇には興味がなかったのではなからうか。というよりも当時の寿命からは老齡、否、六十歳に近い宗因は高齡であり、そこまでの活躍はできなかったのではあるまいか。事実、還暦を迎える寛文四年からは「一幽」の俳号より、「西翁」の号が散見できるのである。

さすれば、この西鶴二十一歳立机が誠ならば、師は西山宗因以外の大坂衆、天満衆ということになる。

しかし、西鶴が三十二歳の時、鶴永の号で刊行した処女撰集『生玉万句』（一六七三）は、その序に記すように、「狂句、かる口」の句作であった。これは貞門俳諧を打ち破る新風の先駆けと見るべきで、その功成つて、この年の冬、西山宗因から一字をもらい、鶴永改め、西鶴と号したと考えるのが順当ではあるまいか。

さて、西山宗因が連歌師であることは留意しなくてもよいのだろうか。尾崎千佳氏によつて、西山宗因が連歌、俳諧どちらでも時宜にあわせて「宗因」号を用いたことは詳細に報告されている。そうなると、連歌の場に出座してはた可能性も否定できないのではなからうか。もちろん、西山宗因の連歌の場に西鶴がいたという確証を得たわけではない。むしろ、管見では否定的である。ただ、磐城平藩の内藤親子、豊前小倉の小笠原忠真のような大名家や歴々の神社等に入入りするほどの格式を持つ西山宗因が、出自も怪しい人物を手元に置くであらうか。



図 2



図 1



図 3

【図1】は延宝元年刊の西鶴編『歌仙大坂俳諧師』に載る西鶴の「鶴永」時代の自画像である。【図2】は天和二年刊の土橋春林編『百人一句難波色紙』に載る「西鶴」である。自画とされている。この両者の違いは、一見して剃髪しているか否か、帯刀しているか否かである。剃髪については、妻を亡くした延宝三年というのが翌年の『誹諧大坂歳旦』の西鶴句の詞書などから定説である。帯刀については難しい。寛文八年、町人の帯刀禁止令が出て以来、町人が大刀を佩くこ

とは慎まれたはずで、威風堂々の西鶴の帯刀絵姿は何を意味しているのでしょうか。もちろん、西鶴が士分であれば申し分ないが、その説は短絡過ぎるであろう。

ここにあげた【図3】は元禄六年刊の『男重宝記』巻二の四「連歌俳諧の仕やう」の項の画である。『西山宗因全集』に掲載するこの画の解説は以下である⁴⁵⁾。

「はいかいする所」と題された一面の上部に松永貞徳の俳席図、下部に宗因の俳席図を描く。貞徳座の連衆が扇子を手にした富裕な町人風であるのに対し、宗因座の連衆は脇に刀を置いた武士風の人々と見える。貞門俳諧と宗因流俳諧の階層差を象徴的に示していると思われる。

すなわち、【図2】の西鶴図は西山宗因と一座した際の正装ではなかったかと推察する。

それにしても、加藤家に仕えていた西山宗因の門をくぐるにはそれなりの格が必要であったろう。先述の岡西惟中が士分であったことを考慮すると、西鶴も町人とは言え、西鶴と親交のあった三田浄久の祖父水野如雲が福島正則に仕えていたように武士の家系であったことは十分に考えられる。松尾芭蕉が蕉門に許六他地方の武門にある人々を門人として手篤くしたのも宗因座を意識したからではなかったか推察する。もつとも、岡西惟中や松尾芭蕉に西鶴を見下した言があるのも、西鶴の先祖の家系は武家としては哀れな末路にあったのではないか、それが西鶴武家物の歴史認識に関わっているのかも知れないにとどめたい⁴⁶⁾。

いずれにしても西鶴の蠢動期には検証すべき事が山積されていると言えよう。

五、おわりに

提起した俳諧師西鶴の軌跡の検証は俯瞰に終わり、蠢動期の再検証も確証は得られていない。しかし、今後の研究

がその穴を埋めてくれればという、ある意味無責任な挑発を企図した本論考ではある。特に、西鶴浮世草子の細部にこだわった読みや典拠探しも限界を見せ始めた今、西鶴の文事全体から個々の作品を読み直す、いわば様式論的な解明方法も必要ではなからうか。やはり、西鶴俳諧の本質性を一句一句から再精査する必要性があるのではあるまいか。そして、延宝年間前後の談林俳壇を盛り上げた、三都と地方俳壇のグループについても最高が必要であろう。課題を提示して終わりとしたい。

注

- (1) 天理図書館編『図録西鶴』一九六五年刊。
- (2) 野間光辰著『西鶴年譜考証』中央公論社 一九五二年刊。
- (3) 江本裕「哥仙大坂俳諧師から大坂歳且まで」『大妻国文』（大妻女子大学国文学会）第十六号 一九八五年刊 所収。
- (4) 森川昭「延宝四年西鶴歳且帳」『文学』（岩波書店）一九七五年刊 六月号 所収。
- (5) 拙稿「古典文学における「物語」と「読者」―書写・印刷史を視座として―」『文学・語学』（全国大学国語国文学会）第二二七号 二〇一九年刊 所収。
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 注(2)に同じ。
- (8) 拙稿「『俳諧石車』からみる元禄三、四年の西鶴と京都俳壇」『俳文学研究』（京都俳文学研究会）第六十九号 二〇一八年刊 所収。
- (9) 拙稿「西鶴『一目玉簪』と『海の道』―島国文化としての視点から―」森田雅也編『島国文化と異文化遭遇 海洋世界が育んだ孤立と共生』（関西学院大学出版会 二〇一五年刊）所収。
- (10) 『俳文学大辞典』（角川書店）「西鶴」項目担当の上野洋三氏は「俳諧入門」一〇代半ば（「新風樹立」漢文十三）（絵俳書刊行）（失教俳諧創始）（談林俳諧消滅）（晩年の憤り）として俳業を記されているが軌跡としての分類ではない。
- (11) 拙稿「西鶴の海と舟の原風景」『西鶴大矢数』にみる地方談林文化圏の存在」篠原進・中嶋隆編『ことばの魔術師西鶴』

矢数俳諧再考』（ひつじ書房）二〇一六年刊 所収。

- (12) 基盤研究（C）森田雅也代表「地方談林俳諧文化圏の発展と消長―西鶴の諸国話的方法との関係から―」課題番号 24520252）期間：平成二四―二八年度」ホームページ公開。

- (13) 拙稿「手紙の道。遙かなり。―地方俳壇と物流網が織りなす書簡ネットワーク―」『文学・語学』（全国大学国語国文学会）第二二三号 二〇一八年刊 所収。

- (14) 『西山宗因全集』第五卷「伝記・研究篇」（八木書店）二〇一三年刊。

- (15) 『西山宗因全集』第三卷「俳諧篇」（八木書店）二〇〇四年刊。

- (16) 拙稿「西鶴の武人形象にみる歴史認識―その敗将溢美の方法をめぐって（上）―」『日本文芸研究』第六〇巻第三・第四合併号（関西学院大学日本文学会）二〇〇九年刊。

※本稿は注記以外にも『西山宗因全集』全六卷（八木書店）の成果を参考にした部分が多い。記して感謝したい。

※本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）森田雅也代表「上方文壇と地方談林俳諧文化圏との繋属関係の研究―海川・物流網を視座として―」課題番号 17K02480）期間：平成二九―三三年度」として助成を受けている。